



TAKE OFF press

TAKEO Future Frontier

【校是】質実剛健 報恩感謝

佐賀県立武雄高等学校

校長通信 NO. 22 R7. 02. 15

文責 校長 下村 昌弘

E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp



学校 HP

PERFECT ITEM としての“本” — そうだ、試験が終わったら本を読もう —

ヴィム・ヴェンダース監督の映画『PERFECT DAYS』を見た。東京を舞台に役所広司が演じる平山という清掃作業員の何気ない日常を描いた作品だ。清貧の思想と

いうか、足ることを知る人生こそがパーフェクトなのだという事だろう。寡黙な主人公。きれいとは言えないが掃除の行き届いた古いアパート。“格好いい”とすぐには言いにくいが誠実に公衆トイレの掃除をこなす毎日。そしてたくさんとは言えないけれども、食堂、銭湯、バーなどいくつかの行きつけのお店。会話は一言か二言。幸せとは何も特別な何かではないことを教えてくれる。



<https://eiga.com/movie/99306/photo/>

この主人公は毎日寝る前に欠かさず数ページの読書をする。行きつけの古本屋で買ったおそらく安い文庫本だ。彼のアパートには彼の愛読した本が少しばかり並んでいる。

気に入った本を煮詰めるように読み進める。ゆっくりでいい。しかししっかりと。

僕は学生時代、村上春樹が好きだった。彼の作風をまねて小説のまねごとを書いたこともある。当時、木造モルタルのアパートで先輩から譲り受けた2層式の洗濯機をガラガラとまわしながら彼の本を1ページ1ページそれこそ“舐める”ように読んだ。一気に読むのがもったいないから。ちょっとずつ、少しずつ味わい続ける楽しさと喜びがそこにはあった。お金はなかったけど時間だけはたっぷりあった。精神的にも満ち足りていたと思う。タイパ（タイムパフォーマンス）という言葉が席卷する今の時代、書物には余計な情報が紛れ込みすぎていて忙しい人のニーズには合わない、読書はノイズだとされているむきもあるようだ。必要な情報だけをネットで効率的に手に入れることができるのだから読書は無駄という考え方だ。情報と読書はトレードオフの関係になってしまった。

十数年前、全国に先駆け佐賀県の学校に電子黒板と一人一台の情報端末が導入された。その仕事に関わっていた頃、「紙の本は古い。これからは読むなら電子書籍。本はもう買わない」とそれまで月数万円を投じていた書籍代を一切返上した。しかし、今はまた紙の本をちくちくと買いあさり、昔の本は図書館でがつつり借りてくるようになった。

読書は断じてノイズではない。静謐な世界に誘う PERFECT な ITEM だ。心には本というものでしか開かない扉がある。

正月のラジオ番組で芸人の塚地武雅氏が村上春樹の『かえるくん、東京を救う』を2日間にかけて朗読した。味のあるいい声だった。本には声の文化も伴う。そういえば時々本を読みながら尊敬していた先生の声でその文字を追うことがある。作家の声で読み進める時もある。そういう時、心に二重にしみわたる。



試験が終わってひと段落着いたら静かに本に向き合ってみてほしい。

<https://p-jinriki.com/talent/drunckdragon/>

SaganSat0 号機開発活動 成果はいかに!? –JAXAGA SCHOOL で深ぼる!–

本校科学部は令和3年度から宇宙科学館が主催する JAXAGA SCHOOL (ジャクサガスクール) に参加し SaganSat (サガンサット) 0 号機の開発に取り組んだ。機は国際宇宙ステーションから宇宙に放出された (これだけでもすごい!) が、地上でデータを受信できないままに終わった。

傍^{はた}から見ると一見失敗に見えるが、実はそうではない。ここからが探究の始まりだ。「なぜ失敗したのか」その要因を探る。また「もしデータが送られてきたとしたらどう処理するのか」そのシミュレーションを試みる。実に科学的な思考だ。

先輩の研究を受け継いだ現部は“赤外線を使った地球の気候”について研究を進めた。

この研究は赤外線カメラを使って宇宙から地球上の雲の量や分布を測定し、洪水や水害の予測をいち早く行えることを想定して行ったものだ。(発表メンバー: 浦郷 侃^{つよし}・木須 勝太^{しょうた}・杉光結花^{ゆうか}・前田実日子^{みかこ}・西津海^{さいつかい})



トライ&エラー。しかしエラーをエラーで終わらせない経験が明日につながる。そう感じさせてくれた取組だった。

エラーから立ち直るために –落ち込んだら自分時間を大切にクウ・ネル・ワラウー

“人生はトライ&エラーだ”とひと口に言っても、エラーしたら誰だって落ち込む。自分が一生懸命考えて努力してもうまくいかないことはたくさんある。というかほとんどがそうだと言えるかもしれない。

困難にぶつかってどうしようもなくなった時、折れない心があればいいけれど、それも簡単ではない。要は、折れてもいいから、もう一度元の状態に戻れるような力 (レジリエンス) を身につけることだ。変化の速い、複雑化した、ストレスフルなこの現代社会では、どんな困難な状況にあっても柔軟な気持ちで立ち上がることがどれほど大切なことか。

家族や親しい友人に愚痴をこぼしてもいい。自分の中にため込まないようにしよう。外に向かって吐き出すことで他人からの感想や意見は自分を客観的に見るきっかけになる。

しかし、一番は自分が楽しいと思える時間を持つことだと思う。それが自分を立て直す原動力になる。自分の好きなことや趣味に没頭する。そのことで「自分も捨てたもんじゃないな」とか「やりたいことはまだまだたくさんあるな」と気づくだろう。どんなことがあっても自分を見失わないで。

あとは“食べて寝て笑う”! このシンプルな展開が明日の活力を生んでくれると私は思っている。

【当面の主な予定 (2 月後半)】

17 日 (月) 学年末考査 (1・2 年 18 日まで)

25 日 (火) 月曜セミナー

国立大学前期試験

(大学によっては 26 日も)

27 日 (木) 同窓会入会式・卒業式予定

28 日 (金) 卒業式



(閑人閑話) 佐賀の七賢人の中で江藤新平が一番好きだ。江藤は、清廉潔白、真つすぐで純粋な人というイメージがある。司馬遼太郎の小説『歳月』は江藤の生涯を描いている。▼先日、江藤新平復権。島義勇顕彰の記念シンポジウムを聴講した。運よく復活当選。もともと一〇〇人定員のところ四〇〇人に増やしたらしい。人気のほどがうかがえる。▼日本社会を根底から転換する激動の明治維新期、江藤新平は司法卿として四民平等や三権分立、国民皆教育を主導し今の日本の骨格を創った。▼シンポジウムでは作家の井沢元彦氏による基調講演の後、パネラーがいわゆる「佐賀戦争」を再評価する意見交換がなされた。▼前掲の小説を読んだ時もそうだったが、今回のシンポを聴いていても江藤の不遇な生涯を振り返る時薩摩や長州の主要な人物との軋轢が避けられない。となると自然、相手への批判のようなものが生じがちだ。そこでもややもする。▼人は正義と悪の二元論で考えがち。その方が分かりやすい。戦争と平和もそう。僕自身、いろいろな人と話をして「敵」「味方」みたいなものを感じてしまうこともある。情けないことに。▼本来世の中の事象は二つに分けられるものではない。人間関係だって同じ。「中間」「みたいなもの」だってある。▼江藤の話に戻せば、肥前・薩摩・長州、それぞれに対する敬意とか真摯に受け止める心が必要に思える。なんかこの文章自体がもやもやしてしまっただけ。(弓口)